エッセイ

「ヘラクレスの柱」再考

水谷　智洋

市の図書館で借りたビル・ブライソン著、木下哲夫訳『アメリカ語ものがたり　①』(河出書房新社、1997) という、めっぽう面白い本を読んでいましたら、次のような箇所にぶつかって二様の驚きをおぼえました。[1)]

ドルの印（$）の由来については、貨幣にまつわる問題としては珍しく長く議論が分かれている。・・・諸説のなかでもっとも説得力があるのは、8レアルに相当するスペイン産の古いペソ硬貨に記されていたヘラクレスの柱（ジブラルタル海峡東端の対面する二つの岬。もともと繋がっていたのをヘラクレスが引き離したとされる）とそこにまきついた巻物を図案化したというものだろう。(147−8頁)

私の驚きの一つは、ギリシア最大の英雄と$の思いがけない結びつきです。ですがこれは、ほんとかしら、とびっくりはしても、あとはうっちゃっておけばいいことです。うっちゃっておけないのは、「ヘラクレスの柱」の後の括弧内の訳者による注記の部分です。これは私の守備範囲のことがらです。実を言えば、私はずっと以前、平凡社の百科事典の「ヘラクレス」の項をつづったことがあって、その中で「ヘラクレスの柱」に言及したことは確かなのですが、「岬・・・引き離した」という風には書かなかったような気がします。むろん、ヘーラクレース伝説にもさまざまな異説異伝があり、必ずしも一様でないことはよく承知していますが、これが「ヘラクレスの柱」の説明として最適の文言であるのか、いささか疑問に思いました。これはひとつ調べ直してみよう、といつもの癖が出ました。

まず手始めに手元にある研究社の『新英和大辞典』(第5版、1980) を見て

みますと、これまた驚きでした。pillar の項にちゃんと「引き裂」き説が出ているではありませんか。曰く、

Pillars of Hercules... [the−] ヘラクレスの柱《Gibraltar 海峡東端の両岸にそびえ立つ二つの海角；ヨーロッパ岸の Rock of Gibraltar（古名 Calpe）とアフリカ岸の Jebel Musa（古名 Abyla）; Hercules が引き裂いてできたと伝えられている》。[2)]

では私はどう記述したでしょうか。「ヘラクレスの柱」は、よく（？）知られるように、彼の 12 功業中の第 10 番目の物語に登場しますから、その部分を引いてみます。

⑩ゲリュオン Gēryōn の飼牛の生捕り。ゲリュオンは手足が 6 本ずつ、首が三つある怪物で、はるかな西方にすんでいた。ヘラクレスは旅の途中、今のジブラルタルに至ったとき、ヨーロッパとアフリカの両岸に向かい合った巨大な 2 本の柱〈ヘラクレスの柱〉を建てた。[3)]

これでおわかりのように、私は「岬」の「引き離し」ないし「引き裂」きには一言も触れていません。そしてそれは同時に、私が準拠した「ギリシアの神話や伝説を最も便利な形に要約した参考書」[4)] であるアポッロドーロス Apollodoros,『ギリシア神話』*Bibliotheke*（1〜2 世紀）の筆の運びでもあるのです。高津春繁先生（私の指導教官をつとめて下さった方ですので、敬称をつけさせていただきます）の邦訳で該当部分を見てみましょう。

第十番の仕事としてゲーリュオネースの牛をエリュテイアから持って来ることを命ぜられた。･･･そこで、ゲーリュオネースの牛を目ざしてヨーロッパを通過して多くの野獣を殺し、リビアに足を踏み入れ、タルテーソスに来り、旅の記念としてヨーロッパとリビアの山上に向い合って二つの柱を建てた（ἔστησε σημεῖα τῆς πορείας ἐπὶ τῶν ὅρων Εὐρώπης καὶ Λιβύης ἀντιστοίχους δύο στήλας (2.5.10)）。[5)]

それでは、「岬」の「引き離し」ないし「引き裂」き説はどこに見出されるのでしょうか。幸い、The Loeb Classical Library 中の Apollodorus, *The Library*

(1921, Vol.I, pp.212－3) に J.G.Frazer の詳しい注がありますので、それをたよりに典拠にあたってみましょう。

まず、43 年頃の著作とされるメラ Pomponius Mela,『地理書』*de Chorographia* 1.5.27[6] に次の記事があります。

それから高い山がある。その山はヒスパーニアの対岸の山と向かい合っている。前者はアビラ Abila, 後者はカルペーと呼ばれ、いずれもヘルクレースの柱 (Columnae Herculis) である。伝説はこの名称の由来として、ヘルクレース自身がかつては一続きの山脈としてつながっていたものを (二つの山に) 分離した (diremisse)、そしてこのようにして、以前は山塊によって行く手を阻まれていた大洋が、今その岸を洗っている陸地に近づくことを許したのだ、という話を付け加えている。

つまり、ヨーロッパ側のカルペー山とアフリカ側のアビラ山は、もともと一続きの山であったのを、ヘーラクレースがその中間部分を削り取ったか、崩し去ったかして二つの山に分離した、その結果、海中に姿を消したかつての山の部分が新しく水路に生まれ変わったので、大西洋の海水が地中海に流入することになったというのです。メラはカルペー山に近い Tingentera (現 Algeciras ; 図版 1 の地図を参照) の出身ですから、さだめし、自信をもって地元の伝承を書きとめているのでしょうが、ここには「岬」という言葉が見られない点に留意すべきでしょうか。

メラの著作より少し後れて執筆されたプリーニウス C. Plinius Secundus (23－79)、『博物誌』*Naturalis Historia* 3.4 にも、ほぼ同趣旨の記事があります。ここでは「水路の掘削」という言葉で英雄の偉業が具体化されていますが、やはり「岬」は現れません。

海峡の最も狭い部分には、両側に山があって海峡を囲んでいる。アフリカ側はアビュラ山、ヨーロッパ側はカルペー山で、ヘルクレースの功業の限界 (地点) である。このため土地の住民たちは (これらの山を) かの神の柱と呼び、(彼がその柱の) 間に水路を掘削した (perfossas)[7] ために、以前は阻まれていた海が流れ込むようになり、自然の様相が変わったのだと信じている。

水路掘削説は、実を言えば、すでに前 1 世紀中葉のシケリアーのディオドー

ロス Diodoros,『世界史』*Bibliotheke Historike* 4.18.5 に出ています。

（リビアとヨーロッパの）両大陸はつながっていたのを（ヘーラクレースが）その間を掘削した（διασκάψαι）、そして水路を切り開いたことにより、大洋がわれらの海と入り混じる事態を生ぜしめた。

というのがそれです。しかしこの説は、「これと正反対のことを唱える人々もある」として紹介されるもので、「これ」に当たるのは次の文章です。すなわち、

ヘーラクレースは大洋に面するリビアとヨーロッパの両大陸の最先端に達したとき、遠征の記念の柱を建てることを考えた。そして永く記憶にとどめられるような偉業を成し遂げんと欲して、両方の岬を（沖合い）はるかまで積み上げた（τὰς ἄκρας ἀμφοτέρας ἐπὶ πολὺ προχῶσαι）と言われる。その結果、以前は二つの岬は遠く隔たっていたのに、水路が狭くなった。それは、水路を浅く狭くすることにより、巨大な海の怪物が大洋から内海に逃げ込むのを防ぐためであり、同時にまた、偉業によってその遂行者の名声が永遠に記憶されることを願ったからであった。(4.18.4－5)

両大陸間の距離を狭めて海峡 ── 遠く隔たっているなら、そもそも「海峡」ではないでしょう ── を出現させたというのですから、陸つづきであったところに水路を切り開いたという伝承とは、まさしく正反対です。しかし、この水路狭隘化説を伝えるのはディオドーロスのみのようで、その意味では貴重な記事ではあるのですが、ディオドーロス自身は水路埋め立て説と掘削説のいずれにも加担しません。「しかしこれらに関しては、各人が好きなように考えて差し支えない」との一文でこの節をしめくくっているからです。

こうして見てきますと、「ヘラクレスの柱」の位置についてはなにも問題がないかのようですが、ストラボーン Strabon (64BC－c.AD25)、『地理書』*Geographika* 3.5.5.C170 は、イベーリア人およびリビア人はガデイラ Gadeira（ラテン語名 Gades；現 Cadiz）説を主張している、またガデイラ以遠を唱える者もある、と報告しています。しかしそのストラボーンが、「大多数のギリシア人は（ジブラルタル）海峡近辺説」と言うのですから、私たちもここではギリシア人の通説、またローマ人の伝える巷説に従っておくこととし、次には肝

心の「柱」の正体を考えてみましょう。

まず、アポッロドーロスの「柱」は山の上に建てられたもので、山そのものではありません。メラとプリーニウスのそれは二つの山です。ディオドーロスでは、どうやら、二つの岬のようです。この「岬」は ἄκρα の訳語ですが、それは「山頂」、「峰」でもありえますから、ヘーラクレースが海に積み上げた土砂や岩石の量如何では、小高い丘あるいは本格的な山が出現して、それが沖合いにのびて岬となったという事態も考えられましょう。(単に海抜 1〜2 mの細長い土地からなる岬では、「偉業」のイメージからは程遠いでしょう。) とすれば、「柱」の正体は、山上に建てられた記念碑のようなものか、ある程度の高さのある山ということになりましょう。

ここで地図が登場します。従来、私が利用してきた古代地中海世界の地図はどれも小さくて、ジブラルタル海峡あたりの地理・地勢はよくわかりませんでしたが、2000 年にプリンストン大学出版局から刊行された大地図 *Barrington Atlas of the Greek and Roman World* は、ヨーロッパ・アフリカ両大陸間の最も接近している地域の様子をも克明に教えてくれます (図版 1 の地図参照)。これを見れば、昔、地中海を西へ西へと航海していたギリシア人がはじめてこのあたりにさしかかったとき、海峡をはさんで南北に向かい合う二つの山を遠望して、これこそ、世界の西の果てに足を伸ばしたヘーラクレースによって建てられた記念碑に違いない、と思い定めたであろうことは想像に難くありません。しかしながら、英雄がこの海峡を狭めたとか、逆に、山脈を切り崩して水路を開いたとかは、はるかな東方に暮らす大方のギリシア人があれこれ論ずるような話題とは、到底、思われません。それはやはり、プリーニウスの記事にあったように、土地の住民たち indigenae が、ヘーラクレース伝説が広く知られるようになった頃、そこに付け加えた空想の所産と判断されましょう。

そこで本稿の結論めいたものです。私がまた百科事典か神話辞典用の記事をつづる必要にせまられたとします。その際、「ヘラクレスの柱」に関しては、もしスペースに余裕があるなら、

> (ヘーラクレースは) 海峡をはさんで二本の柱をたがいに向かいあわせてたてた。一本はヨーロッパに、一本はアフリカに。一説によると、二つの大陸はその昔陸つづきであったのを、ヘーラクレースがあいだを切って水路を通したか、または断崖を両側におしひらいたのだという。しかしまた逆に、これまであった海峡を、鯨やそのほかの海の怪物たちが侵入するのを防ぐため

に、ヘーラクレースがせばめたのだとする説もある。[8)]

を良いお手本とするでしょう。もし余裕がなければ、上記の文章から「一説によると」以下を省略します。つまり、本筋はあくまで「英雄が二本の柱を建てた」なのです。また、英和辞典の the Pillars of Hercules の説明としては、

Gibraltar 海峡東端にそびえる二つの岩山；ヨーロッパ側の Rock of Gibraltar（古名 Calpe）とアフリカ岸の Ceuta[9)]（古名 Abila）；もともと Hercules が建てた 2 本の柱であったと伝えられる。

あたりに落ち着きそうです。

注

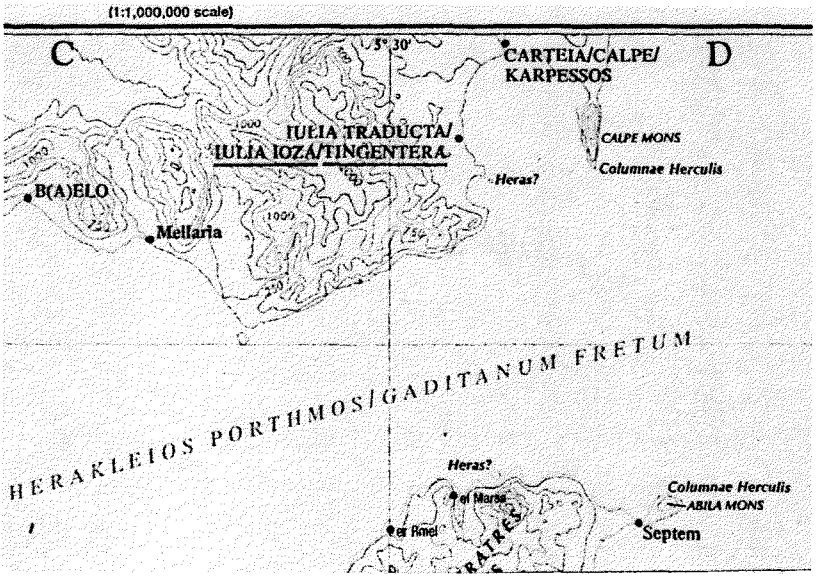
1) 同書②の「訳者あとがき」によれば、原著は Bill Bryson, *Made in America, An Informal History of the English Language in the United States* で、1994 年に英国で、内容に多少の異同のある版が 1995 年に米国で出版されたとありますが、刊行地の記載がありません。後に、同書の英国版が東京大学大学院言語情報専攻に所蔵されていることが判明し、見せてもらいますと、書名は単に *Made in America*、刊行地は London、引用部分は pp.83－4 にありました。
2) 同辞典の第 6 版（2002）も同じです。なお、「海角」とは、『日本国語大辞典』（小学館，1973）によれば、「陸地が海に細長く突き出た、先端の部分。みさき。さき。はな。」の由です。
3) 『大百科事典』（平凡社）、1984、第 13 巻、571 頁＝『世界大百科事典』、1988、第 25 巻、571 頁。
4) アポロドーロス著、高津春繁訳『ギリシア神話』（岩波文庫）、1953、まえがき 8 頁。なお、*Bibliotheke* は、周知のように「図書館」、「書庫」などの意ですが、この書物に限って『ギリシア神話』の名で通っているようですから、それに従っておきます。
5) 同上、99 頁。なお、本稿では、Λιβύη、Εὐρώπη とそのラテン語 Libya、Europa を高津訳に合わせて、それぞれ「リビア」、「ヨーロッパ」としておきます。

6) この数字は、Budé 叢書の A.Silberman の校訂本（1988）によっていますので、Frazer の注にある数字と少し異なります。

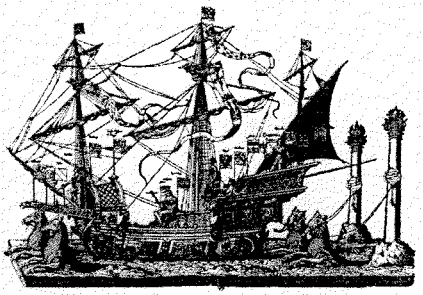
7) *Oxford Latin Dictionary*(1968－82)の perfodio の項は、'2 To dig a channel through.' として、この箇所を挙げています。その際、perfossas の前に（columnas Herculis）を補って解していますので、私も本文のように訳しておきました。ついでながら、山を崩して水路を開いたという趣旨の発言は、ラテン語文献では、セネカ L.Annaeus Seneca（c.4BC－AD65）の悲劇『狂乱のヘルクレース』*Hercules Furens* 237－8、『オエタのヘルクレース』*Hercules Oetaeus* 1240 にも見られます。また、5 世紀のカペッラ Martianus Capella、『メルクリウスとピロロギアの結婚』*de Nuptiis Mercurii et Philologiae* 6.625 に、montium praedictorum effosis radicibus の語句があります。なお、これはギリシア語文献ですが、Frazer の注にある 15 世紀の Tzetzes, *Schol. on Lycophron* 649 は、残念ながら見られませんでした。

8) R.グレーヴス著、高杉一郎訳『ギリシア神話　下巻』、紀伊国屋書店、1973、105－6 頁；(原著) Robert Graves, *The Greek Myths*, Penguin Books, 1955.

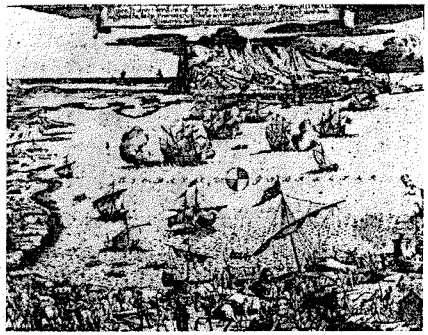
9) Abila 山のあたりは現在もスペイン領で、Ceuta と呼ばれているようです。



図版 1　Columnae Herculis



図版 2　皇帝の棺を乗せた船の後方で海の怪獣に引かれる 2 本の「ヘラクレスの柱」(1559 年作の銅版画「カール 5 世の華麗なる葬儀」)



図版 3　英艦隊に占領されるジブラルタル (1704 年)

図版説明

1　Richard J.A.Talbert (ed.), *Barrington Atlas of the Greek and Roman World*, Princeton UP, 2000, Map 28 (部分)

2　『図書』(岩波書店)、第 675 号 (2005 年 7 月)、9 頁より。詳しくは、同誌 6－10 頁に掲載された宮下志郎氏の「アントワープと、巨大魚の山車」をご覧下さい。

3　『世界歴史事典』(平凡社)、第 8 巻、1955、318 頁より。なお、ジブラルタルは今も英領です。